



1997年2月。遺作「土の迷宮」シリーズ。雪の中、池田満寿夫、施釉中。



文・写真 増穂登り窯 太田治孝

2013年2月。昨年は工房のシクラメンが満開だった。

第7回 豪雪

2月15日、山梨県内は一晩で114cmの積雪となりました。窯場は、なんと150cm以上です。北海道、東北、北陸の方々からすれば、2月の季節では、当然のことでしょう。

3月中旬には、富士山で雪崩がありました。驚くなかれ、山梨県には除雪車が一台もないと知り、二度びっくりです。

窯場は楡形山中腹850mに位置します。甲府盆地は約300m



今年2月15日。工房は豪雪で埋まる。工房前から一歩も外へ出ることができない(今年2月15日)。



なので、標高差は500m以上、温度差になると5度以上もある。夏は涼しく天国です。現在、窯場は春・夏・秋の9カ月間に集中している。雪の心配はいりません。

今年の4月は、『陶遊』復刊1周年記念・1000円で薪窯焼成が開催されます。予定通り窯詰めは4月19日に行います。

十数年前の2月に穴窯焼成中に一晩で1m以上の積雪となったことがありました。4日間の焼成には、延べ20人の焚き手を必要としますが、大雪の中、窯場への道路が通行止めとなってしまい、4人での焼成となったのを思い出しました。食料と水は充分でしたが、停電となってしまい困りました。増穂登り窯は薪窯焼成中、温度計はデジタル計を使用しているのですが、一時はどうなるかと思いましたが、24時間の停電をなんとか乗り切りました。焼成時間と昇温については、過去のデータが役立ちました。重要なポイントは、全体の薪使用量と焼成中に焚き口から引き出す色見本が目安となりました。もっとも、その昔は温度計などありません。焼成時間と薪の量、そして炎の色、作品の色と光



1997年2月。遺作「土の迷宮」シリーズ。満寿夫八方窯で焼成中。

沢で判定したのでしょうか。鉄の棒で色見本を出したかどうかは不明です。大雪の中の焼成は苦勞しましたが、良い経験となりました。1997年、2月2日から5日の間、池田満寿夫八方窯で焼成しました。池田さんが急性心不全で死去したのが3月8日、4月にオープン予定の長野市松代町にある「池田満寿夫美術館」のための新作陶作品「土の迷宮」シリーズを焼成しました。このときも30cm以上の積雪でした。体調の悪い中、池田さんは愛犬たちを連れ、熱海の自宅から素焼きした作品を増穂登り窯に移動させ、雪の中、窯詰め作業となりました。10人の焚き手を集め、雪の中の仕事です。大量の食料を準備し、窯焚きは始まりました。池田さんの焼成にはいつもパートナーの佐藤陽子さんと愛犬が同行しています。犬たちは雪が大好きです。ゴールデンレトリバーのベストとエース、柴犬のドン、ピカソは大喜びで窯場内を走り回っていました。「土の迷宮」シリーズは、現在池田満寿夫美術館に展示されていますが、この大作品10点が陶作品の遺作です。素焼きした作品は、工房内で化粧土、釉薬、ベンガラを施釉に2日間、窯詰め1日、焼

成に3日です。外は雪、何かと仕事はしにくいものです。薪置き場からの新移動は、キャタピラ付き車を使用しますが、足場は悪く倍以上の時間を必要とします。体調の悪い池田さんは監督ですが、雪の中の焼成はかなり負担になったことでしょう。窯出し後の作品洗浄中に流れた水が凍結したのを思い出しました。

美術館オープンの図録撮影には間に合い、池田満寿夫の陶新作品として発表しました。そして、この作品が「土の迷宮」シリーズの遺作となってしまいました。

窯出しから一カ月後の3月8日、自宅で死去されました。今年池田さんの生誕80年です。大雪のイメージは、池田さんとの窯焚きと今年の豪雪となりました。